

「戦争と医の倫理の検証を進める会」に期待する

新医協理事、戦争と医の倫理の検証を進める会世話人 川田啓史郎

今年、韓国併合から一〇〇年の年である。我々医学関係者は、日本が犯した戦争や侵略の歴史から学ぶべきことがある。特に一九三一年の満州事変から始まり、一九四五年のアジア・太平洋戦争の敗戦に終わる足掛け十五年の日本による中国・アジア侵略の戦争（十五年戦争）時に起きたことの中には、忘れてはならないことが沢山あった。そこでは「医の倫理」に反する医学研究や医療行為が平然となされていたのである。

当時、中国、ハルビン近郊にあった旧日本軍七三一部隊の医師・医学研究者は、帝国大学医学部から派遣された人たちであったが、使用が禁止されていた細菌兵器の開発を秘密裏に行い、憲兵隊が捕らえた抗日活動家を、ペスト菌の毒力試験などの被験者として使って殺害していたことはあまりにも有名である。また、当時日本が現在の瀋陽に設立した満州医科大学の一部の医学研究者は、憲兵隊の協力を得て、反日活動家を大学の解剖室で生体解剖し、遺体から得られた新鮮な臓器標本を使って研究を行い、多数の医学論文を発表していた。さらに、中国に設けられた日本軍の病院では、捕らえてきた中国人の抗日活動家や一般市民を、手術研修と称して軍医に生体解剖させ殺害していた。その他にも、軍医による生体実験がいろいろと行われていた。戦後、これらの医学的犯罪行為を行った医師・医学研究者たちの多くが、冷戦という狭間の中で、罪を問われることな

く医学界に復帰し、その重鎮として活躍してきた。戦後六五年になる現在まで、残念ながら日本政府のみならず日本の医学界の中心的存在である日本医師会や日本医学会からも、これらの行為に対し組織としての正式な謝罪や検証の必要性の声は起こらなかった。

しかしながら幸いにも、これらの行為を真剣に検証し、正しい「医の倫理」の確立を求めていくこうとする動きが、医学関係者の中から起こってきた。それが、昨年九月二七日の「戦争と医の倫理の検証を進める会」の発足である。この会は、

二〇〇七年大阪で開催された第27回日本医学会総会に対し、戦争と医の倫理の検証を求めた「戦争と医学」実行委員会の活動を継承し、さらに発展させていくとする組織である。当面は、二〇一一年東京で開催される日本医学会総会に、「戦争と医の倫理」の課題を取り上げるよう提案していくと同時に、会が独自に開催する国際シンポジウム、展示などの活動が予定されている。しかし、それだけに止まることなく、多方面にわたって、正しい「医の倫理」の確立に向けた活動を進めていくものと思われる。

新医協の皆様にも、是非この会に個人として参加され、活動を支えて下さることをお願いしたい。